アッラーの本質が慈悲であり慈愛である以上は、帰依者の目標もまた、慈悲・慈愛であらねばなりません。

世界の宗教のうち、キリスト教の本質が愛であり、仏教の訓えが慈悲であるならば、イスラム教の本質と符合するもので、登る道は異なっても、仰ぐ山頂は同じであるという諺の通り、各宗教の提携の必然性を意味するものと考えます。

セッションⅢ

アジア共同体構想と宗教統一

——天道教から見る——

朴時仁（パク・シイン）

一九二一年生まれ。
ソウル大学大学院文学博士号取得。現在、ソウル大学教授。専攻：英文学。
〈主著〉
『アルタイ文学史研究』（一九七〇、探求堂）、『日本神話』（一九七七、探求堂）、『古代日本と韓国文化』（共著）（一九八〇、日本学生社）など多数。

一　天道教略史

天道教は韓国固有の宗教である。それは東学として始まった。東学の東は中国に対して韓国を意味し、東学は西学といわれたキリスト教に対して、韓国宗教という意味であった。東学の開祖、崔済愚は一八二四年、韓国東南部の慶州に生まれた。当時の他の少年らと同じく、彼は幼いときに漢文を教わった。十三歳のときに父を失った彼は僧門に入り、国内の各地を巡りながら、その史上最大の危機を迎えている自分の祖国の農民の窮境を目撃した。

当時は東アジアの列国にとっては激動期であった。ヨーロッパやアメリカから開港を求めて攻め寄せてくる遠征隊に悩まされているときであった。

日本では、アメリカの黒船の要求に屈して開港した徳川幕府が、強大な諸藩に見切られて、数百年間政権を奪われていた王政が復古して、一八六八年に天皇政府が始まった。清国は、一八四〇～四二年の阿片戦争で英国に破れて香港を割譲し、西洋に対して門戸を解放したので、土着の中国人に軽視されて、明朝の貴姓を名乗る洪秀全が一八五〇年に広西で乱を起こした。洪は、イエス・キリストの教えを聞いて、自分は天にいます神の子で、イエスの弟だと主張した。彼の乱は南中国の諸州に急速に広がって、洪秀全はそこに一八五一年に太平天国なるものを樹立し、農地改革も施行した。彼は「倒満興漢」というスローガンで諸州を攻撃し続けた。この内乱の最中一八六〇年に、英軍と仏軍が天津と北京に攻め入って、清帝は天津条約を結び、キリスト教の布教の自由を許

した。

朝鮮で崔済愚が東学を布教しはじめたのはちょうどこの年であった。東学は仏教、儒教、道教の経典からの短片的な引用に、人間は天にいます神の子であるという信条を混入したもので、この信条は、当時朝鮮で二万ほどの信者を持っていた天主教から借りたものであった。彼は、キリスト教すなわち西学に対して、自分の新宗教を東学といった。なぜならば、その当時朝鮮の政府は天主教を厳しく迫害していたからであった。彼は、人はだれでも天にいます父の子で、お互いに兄弟であって、地位の上下にかかわりなく平等に生まれた者であるから、平等な権利を与えられるべきであると唱えた。彼は地方の官史の秕政誅求を是正させることを民衆に訴えた。そして怪呪文を配り、それを焼いて呑めば、いろいろな不幸や病気もなくなり、平和のうちに永久に生きると言った。このような言葉を蒙昧な民衆は喜んで信じて、天主教の教区のような集団に組織された。ソウルの政府は、この新宗教が急速に広まるのを憂い、その創始者である崔を逮捕して、一八六四年に死刑に処した。

この年は、洪秀全が清国の南京で敗戦して毒を仰いで自殺した年であった。洪の敗死で太平天国の乱は終わった。しかしこの乱は、一九一一年に至って清国が滅亡する途をも開いた。

一方朝鮮では、東学の創始者が死刑に処された後、その信徒は郷里から隠れて流民になった。キリスト教すなわち西学を混入した東学の信仰は、次代の教主、崔時亨の布教によりさらに広まった。ますます多くの外国船が渡来して国々の状況が悪化したからであった。一八九四年、彼らは国の南西部の一地方官の秕政を攻撃して東学乱を起こした。諸外国船の来侵に悩まされていた朝鮮政府は、東学乱鎮圧のために清国に救軍を求めた。

時に朝鮮を征服する機会を待っていた日本は、要請を受けなかったにもかかわらず軍隊を派遣して、黄海と朝

鮮で清日戦争を始めた。この戦争に勝った日本は、朝鮮の軍隊を解散させて、朝鮮の併合を目指す果敢な措置をとりはじめた。

今や東学の信徒たちは、滅亡直前の国運を嘆きながら、赤手空拳で日本軍を追い出そうとしたが、それは不可能なことであった。彼らは一八九八年に東学を天道教と改称した。国を救うのは時既に遅く、一九一〇年には日本に併合された。その後、一九一九年に韓人が全民族的に日本の統治に反対して独立を要求して決起したときに、天道教の指導者も、儒教やキリスト教の指導者とともに韓民族の代表として活動した。この抵抗は、日本の植民地政府によって、容易にしかも残酷に鎮圧された。それ以来天道教はくじけて、今日に至るまで平和的に残存している。

二　世界の危機とアジア共同体の構想

一九四五年八月、アジア・太平洋地域で第二次世界大戦が原子爆弾によって終わった。あの時に広島と長崎にいた人々を思うと、私どもは抑え難い辛さを覚える。彼らのご冥福と人類の平和のために祈りたいと思う。原子爆弾の大爆音は、人類が戦争することは今後は絶対に許さないという神の宣言であった。

しかしその時からわずか五年後、新しい戦争が韓国で始まった。北から共産軍が侵略してきたのである。自由世界の十カ国が出した救援軍が、国連軍として共産軍と戦った。それはまさしく第三次世界大戦であった。戦地が韓半島に限られていただけである。その戦争中、韓国人は天地の神々に祈った。

「天地の神々様、われわれはあなたを祖先として崇めています。この信仰によって、われわれは皆兄弟であることを認めています。しかしわれわれは兄弟らしく行動していません。われわれが兄弟らしく行動するならば、このような戦争が地上に起こるはずがございません。神様、この戦争を早くやめさせてください」と。

しかし、韓国の一キリスト教の信者は、これとは違うお祈りを捧げた。それは文鮮明師であった。師は戦争を終わらせる全責任を神に負わせる代わりに、次のような祈りを捧げられた。「天にいますわれらの父よ、あなたの愛する子たちである人類が、カインとアベル以来、いつも殺し合っている地上を見下ろしておられるあなたのみ心は、悲しみで破れそうであられることを私は分かっています。お父様、私に力を貸してください。この国と外の国々にいる私のすべての兄弟が、あなたの愛するみ子として、お互いに己を捨てて愛し合えるように導く力を私に貸してください。この仕事を成し遂げることができれば、世界は平和になり、財産がある人とない人との闘争もなくなり、人間をそそのかして戦争をさせる共産主義もなくなるに違いありません。神様、あなたの愛するみ子たちが、全員あなたのあふれる愛を受けるにふさわしくなるように導く力を私に与えてください」と。

そして文鮮明師は、一九五四年、韓国で休戦協定が調印された翌年、正式に統一教会を創立し、地上に兄弟愛と平和の新時代を打ちたてるために十字軍運動を始められた。アジア共同体の企画は、この平和の十字軍運動の一環である。

これと関連して、統一教会が樹立した国際宗教財団は、一九八五年の十一月、米国のニュージャジーにおいて世界宗教議会を主催した。その議会に参席した世界のあらゆる宗教の代表者たちは、地上に兄弟愛と平和を増進させるために一層熱烈に協力する旨の決議を満場一致で採択することによって、あらゆる宗教の目標が一つであることを確認した。

三　最近の国際動向

今日の世界は、対抗する二つの部分、すなわち自由世界と共産世界とに分かれている。その各部分は、地球上のあらゆる生物を瞬間的に全滅させるに十分な核兵器を保有して、極めて不安定なデタントをかろうじて保っている。この状況をしばらく考察してみよう。

自由世界に属する諸国においては、各自が私有財産を持ち、自分が選択した職業に従事して、自分の能力の限り利潤を追求することが自由である。この制度の下では、各人各国が速く富を蓄えようとする利己心に従って活動している。その結果、富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなる傾向があり、階級間の分離が甚だしくなっていく。

従って、貧民大衆が共産側の秘密工作や宣伝に耳を傾けて、しばしば社会的不安や反乱を起こすと、急進的政党や将軍らは、これを利用して革命やクーデターを行って共産政権を立てる。このようにして、第二次大戦の終戦以来、あまりにも多くの自由国家が共産化した。従って、ソ連や共産中国と接境しているアジアの自由諸国は、緊密に相互協力を行って、国内の共産勢力を抑制し自由制度を保護することが絶対的に必要である。アジア共同体の樹立が文鮮明師と統一思想研究院によって提議されているのは、これを直接的な目的としている。私はここに集まっておられる名士同僚とともにそれを歓迎している次第である。

他方、共産陣営の状況を見ると、それに属する国々では、すべての財産が国有化されている。それを共産党が人民政府の名の下で国内唯一の企業主になって管理しながら、人民に職務を配当して、利潤を平等に分配すると約束している。しかしその約束を守る共産政権は一つもない。

共産陣営の一般人民は、力以上の強制労働に対して飢餓賃金を与えられている。従って、共産主義は最も集中的で悪性の資本主義にほかならないことが明らかである。共産陣営の諸国は、鉄のカーテン、竹のカーテン等で閉ざされている「動物農場」になっている。その中にいる人民の夢は、自由世界に脱出することである。しかしその夢が果たせる可能性は全くない。くじけた人民大衆は、強制労働をするインセンティブを全く喪失している。従って、広大な平原耕作地を持っているソ連も共産中国も、食糧生産の継続的不足に悩んでいる。従って、十億以上の人口を抱えている共産中国は、人民が私有財産を持って利潤を稼ぐことを許して、今や経済的発展をしはじめている。こうなると、中国と世界最長の国境を持って接しており、中国から奪った広大な地域を返還せよという要求を受けているソ連も、後に取り残されているわけにはいかないので、人民が私有財産を所有して資本主義的になるのを既に認めている。

このようにして、今日世界の両陣営の制度は崩壊しつつあり、他方の制度に移り変わってゆこうとしている。この動向は、アジアの諸国がECやAULAのような形のアジア共同体を形成して、協力してその加入諸国内における共産勢力を根絶させ、自由制度を守り続けるならば、最後には共産主義の終焉を期待できるということを示している。

四　結語

アジアは多くの大宗教の出生地である。キリスト教、イスラム教、ヒンドゥー教、仏教、儒教、道教、韓国の天道教、そして日本の神道も含めた東西の祖先崇拝信仰等は、いずれもアジアで生まれたものである。これらの諸宗教が等しく教えていることは、天にいます父を敬い、あらゆる人を兄弟として愛し、利己心を捨てよということである。あらゆる宗教に共通なこの教えを信ずる用意をだれでもが持っているということは、天道教と太平天国教の急速な波及の例にも見られるように、どの時代においても明らかになったことである。しかしこれらの二宗教の信徒は、自分たちの国が未曽有の危機に処していたときに、革命を試みて失敗し、中国では清帝国の滅亡、朝鮮では植民地化の途を開くことになった。これらの先例は、私どもがアジア共同体のことを考えるにあたって、非常に貴重な教訓となっている。それは共同の脅威に直面していながら、宗教上の主張や階級の利害等によって、社会の安定を破壊すべきではないということである。

上述の二宗教は、官権の乱用によって苦しめられている民衆を解放することを試みたという点において、今日の解放神学に似ている。それらの宗教は、無神論に由来する悲劇、すなわち罪から人間を救うという真の諸宗教の共同目的とは全然無関係なことを試みたのである。

次にイエス・キリストの言葉を引用する。

「だからわたしは、あなたがたは自分の罪のうちに死ぬであろうと言ったのである。もしわたしがそういう

者であることをあなたがたが信じなければ、罪のうちに死ぬことになるからである。」（ヨハネによる福音書八／二四）

「すべて罪を犯す者は罪の奴隷である」（ヨハネによる福音書八／三四）

これらを見ても、真の解放は罪からの解放であるということは、あまりにも明らかである。

キリストはユダヤ人をローマ人の圧制から解放するために来られたのではない。キリストが求めたものは政治的解放ではない。キリストは罪人を罪から解放するために来られたのであり、利己心が犯す罪から人間の魂を解放するために来られたのである。今日、世界の共産陣営は団結しているが、自由陣営は団結しないで、各国各人は己の利己心に動かされて、国内的にも国際的にも不協和と葛藤をしきりに惹起している。このような状況に結末をつけて、今日提案されているアジア共同体を大成させるためには、加入する各国が、諸宗教の共同の教えを遵守し、利己主義を捨て、神を敬い、国内的にも国際的にも兄弟愛を実行することが絶対必要である。

これに関連して、多くの自由国家の安定を脅かしている解放神学について一言述べる必要がある。聖書は、人は皆兄弟であり、富める者は貧しい者に分けて与えよといっている。富める者の持っている物をだれかが奪って、それを貧しい者に与えよとはいっていない。しかし、このようなことを試みている解放神学は、聖書の教えにも、あらゆる宗教の共通の教えにも反抗しているものであることは、少しの疑いもない。今日、解放神学がアジアやその他の地域で起こしている大さわぎは、闘争と共産主義の拡大に役立つだけである。このようなものがアジア共同体の中にあるということは、決して許されるべきではない。アジア共同体の理念は、何よりも勝共運動を根幹とするべきである。

五　あとがき

この論文は、かってソウルで開催されたゼミナールで予備的に発表したことがあります。そのときの論評の中で、二つのことが大変重要でありました。その一は、天道教を生み出した韓国の宗教的伝統について論及されておらず、また天道教の教理も詳しく紹介されていないということでありました。

この論評を誠にありがたく受け入れて、ここで少しだけ付け加えさせていただきたいと思います。

私の論文の「一　天道教略史」をご覧になると、天道教は仏教、儒教、道教から採用したものであるとなっています。それは、天道教はこれらの偉大な宗教に由来する教えを含む立派な宗教であるという意味であります。仏教の無限慈悲、儒教の孝悌を本とした仁義、道教の私邪を完全に捨てた自然と無の境地、このような内容が皆天道教の中にはあります。従って天道教は今日の韓国では大きな宗教になっています。

人即天、同帰一体、諸悪莫作、諸善奉行、地上天国、というような天道教の教えは、誠に良い宗教であることの表れであります。

同じく「一　天道教略史」に、天道教は人間はだれも神の子であるという信条を韓国固有の祖先崇拝から伝承したと書いておきました。

韓国人のこのような信条は、紀元前二十四世紀から伝来しているものであります。韓国の歴史によりますと、韓国民族の最高の祖先は天にいます神であるといわれています。従って韓国人は、自分たちは神の子であり、あ

らゆる人間は兄弟であると好んで信じています。このようなわけで天道教の開創者は、イエス・キリストは神の子であるという天主教の教えをすぐ理解することができたわけであります。あらゆる人間は兄弟であり、神の子であると文鮮明先生がいつも言われるのにも、このような背景が考えられます。

この論文に対するもう一つの論評は、二つの祈りを引用しているが、その出典文献を提示していないというものでありました。

私の韓国動乱のときに、韓国人が捧げたすべての祈りを聞いた人はいないわけです。しかし、私が引用したのと同じ内容の祈りを捧げたであろうということは、疑う余地のないことです。第二の祈りについては、私は次のようにはっきり示すことができます。私は文先生の多くの演説を直接聞き、また書物でも読みました。この世の中で続いている数えきれない戦争を大昔から見下ろしておられる神の限りない悲しみと、人間が罪悪をやめるのを待っておられる神の永年の願いをどうしたらよいのかと、文先生は呼びかけておられます。神のこのような願いに対して、兄弟愛と神中心の生活を実践しましょうという文先生のお招きに対して、ノーで答えようとする人はだれもいないはずだと私は信じています。もしかしたらノーの答えもあるかもしれないと思って待っていますが、だれもいらっしゃらないようです。

論文に二つのタイプの祈りを対照させて載せた理由は、神に対する二つの対照的な姿勢に由来するのであります。

神を父と呼ぶ無数の人々の中で、絶対多数の人々は、何事につけても神の救いと助けを求めています。しかし彼らは、父なる神を助けてあげようとは考えていません。この事実は、彼らが神に対して良い子ではないこと、

偽善者であることを示しています。神に対する二番目のタイプの姿勢、すなわち文先生のお祈りが示しているような姿勢は、神を本当に自分の父として敬い、人類を自分の兄弟として愛するという心情と熱誠の表れであります。

世界のすべての大宗教と韓国の天道教の教えは、このような姿勢だけが神に対する正しい姿勢であり、かつ真の悟りであり、天の平和を地上にもたらし得る道であると言っています。だれでもがこの正しい道を歩きはじめると、あらゆる宗教が一つになって協力し合い、人間の心の中と世の中にあるいろいろな壁を壊すようになるのであります。そのようになれば、われわれは平和なアジア共同体の建設を力強く進めることができるでありましょう。

註

聖書の日本語版からの引用文の中の傍線部分――「もしわたしがそういう者であることを」は that I am he の曖昧な誤訳である。この場合の he（その人）は Son of God, Christ（神の子、キリスト）のことである。韓国語版ではこの部分を「내가그이라는것을（わたしがその人であることを）」、中国語版では、「我是基督」といって正しい。聖書の各国語版にはさまざまな誤訳があるので、相互対照してみる必要がある。